物性研究・電子版 Vol. 3, No. 3, 033901（2014年8月号）

物性研究に限らず、自然科学の研究者にとって、一所懸命に行った研究の成果発表の場として、論文発表と同様に、国際会議での発表が挙げられるのではないかと思います。600 人を超える参加者がいて、ポスター発表が 500 件近い、などというのは、その分野を代表する会議で、如何に自分たちの成果をアピールできるかは、その後の研究動向にも、少なからず影響してくると思います。

論文発表の場合は、いい成果がでたときに限って、雑誌に投稿することになっているので、いい成果がないときは、論文を投稿しなければいい。それだけである。ある意味、明確である。

一方、国際会議での発表の場合、これといった明確な成果がない場合も、会議のオーガナイザーからの招待のメールが来たときは、「まだ会議まで時間がある」「折角のチャンスだ」などの、“いつになく”、前向きな気持ちが沸き出て、「有難くお引き受けします」と“迂闊に”返事してしまい、あとで、冷や汗をかくことになる経験は、読者諸氏にはないだろうか？

そんなに困るのだったら、最初から引き受けなければいい。まさに自業自得である。そういえば、「妻が急に…」「急に大学の用事が…」とかの理由で、ドタキャンする人がいる。軍隊なら、敵前逃亡は銃殺刑である。しかし、よくよく考えてみれば、そもそも招待したのは、オーガナイザーである。こっちからお願いしたわけではない。いい発表なのかどうかは、そもそも、発表者の「課題」ではない。発表者は、自分が話したいことをただ話せばいいはずだ。とにかく、きちんと準備をして「発表」すればいいだけである。最後にはそう割り切るしかない。

おっと、そろそろ、来週の国際会議での発表の準備をしなくてはならない。冷や汗かきながら、とにかく、きちんと準備だけはしておこう。

（加齢臭）